



Title	百人一首改觀抄について
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1951, 3, p. 28-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68381
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

百人一首改観抄について

宇佐美喜三八

本居宣長は京都遊学中に、「百人一首改観抄」を借観して初めて契沖の業績に接し、その卓抜な学説に心を惹かれ、「餘材抄」や「勢語臆断」を始め契沖の著書を相ついで読み、次第に歌学を体得するに至つた旨を、後年自ら「玉勝間」巻二の「おのが物まなびの有しやう」の中で述べてゐる。また同じく「玉勝間」巻一の「ふみども今はえやすくなれる事」の中においては、契沖の「代匠記」が稀観の書であつたことを追憶して、更に「かの人の書は百人一首の改観抄だにえがたかりしき、そのかみおのれ京にて始めて人にかりて見てかはばやと思ひて、本屋ブックヤードをたづねたりしなかりき。板本なるにいかなればなきぞとひしかば、えうする人なき故にすり出さずとぞいへりける。さてとかくして、からくしてぞえたりける」と述べてゐる。これらはともに周ねく知られた記事である。

宣長に「改観抄」を貸したのは、彼の漢学の師、堀景山であったに違ひない。景山は和学和歌にも造詣があつて、その方面においても宣長に少からぬ感化を与へたことは、すでに或の程度まで注意せられてゐる所である。宣長は宝暦七年丁丑五月九日、景山本万葉集

の書入を写した奥書きの中に、景山が今井似閑の門人樋口宗武と親交のあることを記してゐるが(註一)、景山は契沖の説を尊信し、宗武を援けて「改観抄」の刊行にも関係したのであつた。「近世畸人伝」卷三の契沖の条の附載には、「京師に樋口主水といへるは、似閑門人なるよし。(中略) 印行の改観抄は此樋口氏、届景山子にはかりて校合せる所なり。写本に合せては其功見ゆ」と記されてゐる。刊本の「改観抄」五巻六冊は、延享五年正月吉日彫刻、京寺町松原トル町の梅村三郎兵衛によつて板行せられた。宣長はその四年後の宝暦二年三月七日に上京して、同月十六日景山に謁し、同十九日から景山の許に寄宿をして教を受けたのである(註二)。時に宣長は數へ年二十三才、「改観抄」を借りて契沖を知つたのは、それから間もない頃であつたと推測せられる。宣長は景山の書入をした「勢語臆断」を借りて書写してゐるが、その奥書きには「壬申(宝暦二年)五月十二日、本居栄貞写」と見えてゐる(註三)。前述の「玉勝間」の記事によれば、「勢語臆断」は「改観抄」を借観して感銘をうけた後に見たやうに言つてあるから、「改観抄」に始めて接したのは、宝暦二年五月十二日よりも前、屈門に入つて二箇月を経ない間のことになければならないのである。従つて、「かはばやと思ひて、

本屋をたづねたりしに」といふのもその頃であつたと思はれ、刊行後四年をへて、すでに「改観抄」は入手し難くなつてゐたのであらう。「とかくして、からくしてぞえたりける」といふのは、宝暦六年十二月になつてからのことで、その時宣長の購入した「改観抄」は、五巻六冊が二冊に合本してあつて、価は九枚七分であつた(註四)。

宣長にとつて「改観抄」は、そのやうに青春時代の記念の書となつてゐる。「玉勝間」に見える「改観抄」の思ひ出は、われらの心にもまた深い感慨を抱かせる。契沖寂して満二百五十年、宣長歿して

満百五十年の今日、その「改観抄」に関して、ここに私は禿筆を呵して、契沖も宣長も恐らく予期しなかつたと思はれる問題を、文献的な事実によつて考へてみようとするのである。

註一、「本居宣長稿全集」第一輯、五六頁参照。

註二、同書、五一五頁参照。

註三、同書、五六頁参照。

註四、同書、七一頁参照。

II

「改観抄」には田珠庵に伝はつてゐる契沖の自筆本があつて、現在は大阪府立図書館が委託を受けて保管に当つてゐる。契沖全集所収の「改観抄」は、この自筆本を底本としたものである。この本に關しては稿を改めて別に考へたい所があるが、今はその詳細について述べて全集第六卷凡例の解説に譲ることにする。今日写本で伝はすべて全集第六卷凡例の解説に譲ることにする。今日写本で伝はつてゐる「改観抄」は、大体この自筆本系統のものやうで、筆者もまた自筆本と同一本文の写本を藏してゐる。自筆本及びその系統の写本は三巻より成つてゐて、卷初は「百人一首改観抄上」とい

ふ内題の次に、「定家卿老後に小倉山荘に隠居して」云々の文があり、卷尾に漢文の跋を附して、「元禄五年季夏、契沖跋」の年記と署名とがある。また本文の百首の各歌の作者名の下には、その系譜や略伝などが細字をもつて漢文で記されてゐる。これらは自筆本及びその系統の写本に見られる、外面向いた体裁の著しい特徴である。

次に刊本は、上記の如く樋口宗武が姫景山と謀つて校訂を加へ、延享五年に開板されたもので、自筆本の上巻を第一巻と第二巻に、中巻を第三巻と第四巻に、下巻を第五巻の上と下とに分けて、五巻六冊の書となつてゐる。この刊本の巻頭には漢文の序があつて、その末に「元禄五年壬申季夏撰江高津沙門契沖撰」と記されてゐるが果して契沖の書いた序文であるか否かにはなほ疑問が存する。自筆本の巻尾にある漢文の跋は刊本ではなく、刊本の序文は自筆本の跋文によつて後人が作製したのではないかといふ推測も成立つ。その漢文の序について、「延享四のとし丁卯の菊月、花月堂主人樋口宗武識之」とある和文の序があり、次に校訂の凡例が記されてゐる。

本文においては、自筆本の各作者名の下に附けられてゐる漢文の略伝は一切省略され、また所々に校訂者の追考が加へてあるのみならず、自筆本の文を省略したり改竄したりした箇所が極めて多い。省略を施した箇所については、凡例の中に「此書草稿のとき、沖師の注記の手よりもれて、世に伝ふる書寫の本あり。乖謬すくなからず、一二をいはゞ、百人一首一人の歌に列立をいひ、能因法師の歌に三室山の地理をことわり、三条院御製秋の月の歌とする等の説今こと／＼削たり」と見える。即ち刊本では、自筆本の各歌の注釈の末尾にある、百人一首におけるそれぞれの作者並びに歌の序列の根拠に関する考察は、すべてこれを省いてゐる。また能因の歌

(嵐ふくみむろの山)の注釈は、自筆本にある三室山の地理についての説を削除して短いものとなつてゐるが、自筆本には記されてゐない拾遺集の物名歌を例に引き、「今の吾は此哥の係なり」と述べた所があり、三条院の御製(心にもあらでうき世に)の注釈では、自筆本の「此御製詞書にも秋といはねど、秋と聞ゆれば」云々を中心とする説明を削つてゐるのである。改竄を加へた点については、やはり凡例の中で、「書写流布の本に、二条院讀岐高沖石を沃焦石の事と注し、大僧正慈円天台座主になりてと書る説、これらみな先師朱墨別異をなし給ふを、混漫して書写せるは、今ことく削之」といひ、また「万葉集以下の引歌ども、先師五字七字にて略し給ふもあれど、今本書を考て悉之」ともいつてゐる。右の二箇所に見える先師といふのは、後の文から考へると、似閑のことではなく、契沖を指したものとすべきであらう。二条院讀岐の歌(わが袖はしづかに見えぬ)の注釈では、自筆本にある沃焦石と古抄の一説とに関する長い考察を除き去り、追考を附して沃焦石の問題にふれ、前大僧正慈円の歌(おはげなくうき世の民に)の注釈では、自筆本に「みづから智もなく徳もいたらずして、天台の貫首にあげられて」とある所を、「みづから智もなく徳もいたらずして、護持にまゝり」と改め、これらは先師が朱墨で別異を施した所であるといふのである。また自筆本で一二句しか挙げられてゐない引歌は、すべて完全な形にして示し、特に万葉集の歌は原文に改めて掲げ、片假名で訓読をつけてゐる。これら刊本における省略や改竄は、公刊に際して自筆本の内容をより啓蒙的なものに整備しようとする意図からなされたものと思はれるが、いづれにしても、恣意をもつて契沖の文を改めたといふ譏りは免れないであらう。しかし、右のやうに刊本の凡例

の言葉から自筆本の内容を吟味すると、現在田珠庵に伝はる自筆本の「改觀抄」は契沖の草稿本であつて、少からぬ誤謬があり、別に契沖が朱を加へて訂正した定稿本があつたといふことになる。凡例に「世に伝ふる書写の本」といふのは、自筆本と同内容の写本を指したものと見做され、校訂者の「先師朱墨別異をなし給ふ」といつてゐるやうな伝本が、今日はたして伝つてゐるか否かは、なほ今後の調査を必要とするのである。田珠庵の自筆本には、契沖が朱で文を書き加へた箇所が所々にあつて、それらの箇所は全集を見ただけではわからない。全集の「改觀抄」の本文は、契沖が朱で加筆した文も入つてゐる。刊本の凡例にいふ所の二条院讀岐の歌の注釈は、田珠庵の自筆本を見ると、契沖は朱を加へてゐるが、それらは凡例にいふのとは反対に、三条院の御製が秋の歌であり、また二条院讀岐の歌の沖の石が沃焦石であるといふ説を述べるための加筆である。刊本の校訂者が「朱墨別異」といふ所と、田珠庵の自筆本の朱の加筆とは、その目的が反対になるのであつて、このやうな問題については、他日稿を改めて別に詳細に述べようと考えてゐる。

若き日の宣長が借覽して心を惹かれたのも、辛うじて手に入れることができたのも、いふまでもなく刊本の「改觀抄」であつた。俊敏な宣長は、それを通じて契沖の学問的精神に触れ得たのであつて、刊本の「改觀抄」は決して契沖の説を誤り伝へてゐるとはいへないが、上記によつて知られるごとく、契沖の注釈を真に完全に伝へたものではない。今日我々が「改觀抄」について契沖の学説を探らうとすれば、自筆本系統の本文を対象とすべきことはいふまでもないであらう。しかし、それはもとより自明のこととして、自筆本系統

の「改観抄」を学問的対象に用ひる場合には、更に注意を要する新しい問題が存するのである。

三

自筆本系統の書に見られる跋文において、契沖は「改観抄」の成立由来を述べてゐる。故人の長流が百人一首を注し、未だ草稿を終へずして歿したので、その志を遂げざることを惜しみ、短闘を忘れてこれを補つたといふのが、要するにその主旨である。長流には「百人一首三奥抄」二巻の遺稿があつて、長流全集の上巻に、契沖が自筆で頭書を書き入れた彰考館本を底本として収められてゐる。その「三奥抄」と自筆本系統の「改観抄」との本文を对照してみると、跋の言葉の通り、「改観抄」は「三奥抄」を補訂して成つたものであることを、誰しも容易に認めることが出来るのである。従つて、「改観抄」を見た場合には契沖の新見の如く思はれる説の中にも、実は長流の新見が文章も殆どそのまま用ひられてゐるものがあるが、それらは長流の説であるといふ説明が加へられてゐない。例へば「改観抄」の大式三位の歌（有馬山のないさゝ原）の注釈の中には、

此哥、有馬山を男によせ、いなのさゝ生を我身になすらへて、おとこの物いひおこせたるを、風のふくにたとへたり。風にもよほされて、さゝのそよぐこゝろをもつて、いでそよとつけたり。心は、いでそれよと同心したる詞なり。ひとをわするゝ心はなけれども、ひさしうあひみねば、おぼつかなさは、こなたにもおなじことゝいふころなり。万葉に、爵悒の字、おぼつかなくと説り。ひとにはで、胸のうちのおもふことは、晴ぬところなり。此哥も、近代の人、あしく注し来れるなり。へ
全集本による。以下同じ)

契沖の注釈では前の引用文が注の一部分となつてゐて、長流の注におほし。此歌もあしく注し来れり。心をつくべし。（自筆本

による。以下同じ）

といふ説明が見られる。即ち、この注釈では有馬山を男に擬し、猪名の雀原をわが身になすらへたといふのが新見であつて、従来の注はこの点を正しく解釈してゐないといふ意味のことと言つてゐる。

これに対し景樹は「百首異見」で「改観に此歌有馬山を男によせて猪名野のさゝ原をわが身になすらへなどいへるは、もとより序の調べを見しらざるにていふにたらず」と非難を加へ、また「いでそれよと同心したる詞なり」以下、「同じ事ぞといふ心なり」に至る一首の解釈も誤りであると論じたててゐるが、それらを契沖の説であると考へて非難してゐることは言ふまでもない。「改観抄」の注釈を見る者が、これを契沖の創見と考へるのは、むしろ当然のことである。然るに「三奥抄」の大式三位の歌の注釈には、右の「改観抄」の文と殆ど同じ説明が見られるのでありて、契沖は長流の文をそのまま生かして用ひてゐるのである。「三奥抄」の文は次の通りである。

此哥、有馬山を男によせ、いなのさゝ生を我身になすらへて、おとこの物いひおこせたるを、風のふくにたとへたり。風にもよほされて、さゝのそよぐこゝろをもつて、いでそよとつけたり。心は、いでそれよと同心したる詞なり。ひとをわするゝ心はなけれども、ひさしうあひみねば、おぼつかなさは、こなたにもおなじことゝいふころなり。万葉に、爵悒の字、おぼつかなくと説り。ひとにはで、胸のうちのおもふことは、晴ぬところなり。此哥も、近代の人、あしく注し来れるなり。へ

釈では右の引用文が注の殆んど全部となつてゐるといふ相違はあるが、有馬山を男に、猪名の笠原を我が身に見たててあるといふ解釈は、長流の始めて唱へた新見であつて、契沖はそれを承認して「男を山にたとへたる歌万葉におほし」といふ言葉を補ひ、長流の見解を有力化してゐるのである。この大武三位の歌の注釈のことは、一つの例に過ぎない。「改観抄」の注釈には「三奥抄」の注釈が極めて多く用ひられてゐる。すでに「三奥抄」が公刊せられてゐる今日、我々は「改観抄」によつて契沖の説を批判しようとするには、必ず「三奥抄」を参照して、契沖の創見の範囲を見究めなければならぬであらう。「三奥抄」に書き入れられた契沖の頭書を見ると、博引旁証によつて長流の注釈を補つた所が多く、長流の説を訂正した所も少くはない。「三奥抄」の注釈は固より古抄の糟粕を嘗めたものではないが、中には中世的なものの殘滓を留めたものがあることは、時代的にいつて止むを得ない所である。極端な例をあげると、鎌倉右大臣の歌（世の中は常にもがもな）の注釈において、長流は実朝を定家の隨一の門人として賞め、「世の中は」の歌は、和歌の本意、人麿の骨髓を得た歌で、百人一首の別伝の歌の中でも秘中の極秘の歌であり、私に注釈をすることができないと述べ、この歌の意味は少しも述べてゐない。契沖はこの所に別紙を挿んで、「此哥にかぎりて、さしも別に灌頂法門などの、甚深微妙の事ありて隠密するには侍らじ」といひ、長文をもつて歌の注釈を補つてゐるのである。また凡河内躬恒の歌（心あてに折らばやをらむ）の注釈の終りに、長流は「世上に人をまどはすものは、皆偽似せてまぎらはすなり。其時、思ひはからざれば、まどはさるゝ習なれば、心せよとおしへたる哥の心なり」と述べて、躬恒の歌に教訓の意があ

るかの如く釈いてゐる。これに対しても契沖は特に訂正を加へてはゐないが、からした儒学的解釈は承認することができなかつたに相違ない。しかしこのやうに囚はれた所のある解釈は、「三奥抄」全体の上から見れば、極めて僅少なものである。

契沖は長流の書き残した「三奥抄」に頭書を加へてこれを補正したが、更に徹底的な補正を加へて「改観抄」を書いたのであつた。「改観抄」には「三奥抄」の注釈が至る所に用ひられてゐて、経括的にみた場合には、契沖は長流の説を補足するのに努めたといふことが可能である。これは一面からいへば、長流の説と契沖の説との間には、根本的に大きな聞きがなかつたためであるとも考へられる。しかし、「改観抄」の注釈から「三奥抄」の注釈を差し引いた僅かな聞きの中にも、さすがに卓越した契沖の功績は明確に見出しえるものがある。

四

「改観抄」の注釈にも、契沖の書いた他の注釈書の場合と同じやうに、中世の注釈書に見られる神祕的な色彩や索強附会の解釈を退ける、契沖の合理的精神は表はれてゐるのである。その一つの例は持続天皇の御製（春すぎて夏來にけらし）の注釈に見ることができる。百人一首の注釈の権輿とされる宗祇の「百人一首抄」（小倉山荘色紙和歌抄）には、この御製の注釈の中で、

此哥は更衣の心也。其故は、天香久山は高山にて、春の間は霞散して、夏の空に此山さだくと明白にみゆるを、白妙の衣はすとは云也。ほすは衣の縁也。いかで明かにみゆればとて、白

妙の衣とは云ぞと云人有。春は霞の衣におほはれたる山、其霞の衣をぬぎたるやうなれば、白妙の衣とは云り。霞の衣をもて

云る詞なり。されば、春過ぎと云ふも、夏來にけらしといふも、

みな用にたちて大切の詞也。(「和歌七部之抄」所収本による)

といふ説明がある。即ち御製には更衣の意が籠つており、白妙の衣

を干すといふのは、春霞が散じて、夏空に山の姿が明白に見えるこ

との譬喩であると解釈してゐるのである。宗祇は別に「万葉抄」上

卷において、この御製につき、由阿の「詞林采葉抄」卷三の「天香

具山」の条に見える御製の注釈に拠つて、「此山に衣をぼすといふ

事、甘檻神とてましますは、人の真そらごとをたゞし給ふ。然ば衣

を神水にぬらしてぼすと申つたへたり。正義をしらず。(中略)又卯

花さきて衣ぼすに似たりとも申にや」と述べてゐる。(なほ由阿は

「青葉丹花抄」上では、この御製に「此山卯華おほくさきにけるを

衣にせたり」と注してゐる)。この神水にぬらして衣をぼすといふ

説の系統を引く注釈は、後水尾天皇の「百人一首御抄」に引かれた

二つの抄の説にも見られるが、前引の神注にいふ所の、霞の衣が晴

れた山の姿を白妙の衣に譬へたといふ説が、それ以後の注釈では定

説の如くなるに至つたのであつた。幽斎の「百人一首抄」において

も、右に引いた宗祇の注と殆んど同文の説明がなされており、また

幽斎は「詠歌大概抄」卷中でも「春過ぎて」の御製を同様の文で注

解してゐるのである。すでに幽斎が宗祇の説をそのまま用ひてゐる

以上、彼の流を汲んだ堂上家の人々はもとより、地下の歌人たちも

その説に盲従したことは言ふまでもない。それらの人々の注釈をこ

こに一々挙げることは省略する。比較的その説に因はれてゐない「

新古今私抄」(内閣文庫本)の注釈でも、「霞の衣を下に含めりと

申侍ける」といつて、やはり宗祇以来の伝統的な説を無視してゐるな
いのである。

長流の「三奥抄」の注釈は、またその旧来の説を用ひた所はある
が、さすがに旧説を墨守することなく、新しい批判の心が見られる。

長流は次のやうにいつてゐる。

かの山、春の間は霞にかくされて、明らかなるひかりも見えざ
りしを、時のうつるかはるに随て、天も晴、日の光もつよく成

て、をのづから衣干べき時のいたりぬと云心也。是を衣がへの

哥の心なりと注するはしからず、白妙は衣の本色をよませ給ふ

うちに、時節の明白に成たる心そなはれり。又衣を此山に誠に

干たるをよませ給ふにも侍るべし。

この長流の説は、時代の文運の趨勢を如実に反映してゐるといふこ

とができるであらう。その中には、古きものの中に胎動する新しき

機運を感じさせるものがある。絶対視されて来た宗祇乃至幽斎の注

釈書の説は、かくして崩壊の兆しが見えて來たのであつた。更に契

沖がこの「三奥抄」の説に書き入れた頭書の中で、「霞のはれて山

の明白に見ゆるを、白妙の衣ぼすとはよませ給へるなどいへるは、

あらぬ事也」と喝破するに至り、中世的な注釈は眞に終幕の時とな

つたのである。

契沖は「改觀抄」よりも前に書いた精撰本の「代匠記」卷一にお

いても、「春すぎて」の御製について、「後ノ人衣ホシタリト云

ヲ、春ハ霞度リシガ、夏ニナレバ霞ノ霧テ山ノ色明白ニ見ユルヲ云ト

祝セリ。歌ノ中ニナル詞モナキヲ、カク祝セル事不審也。殊ニ更衣

ノ歌ニテ天免ノ事ヲ云ベカラズ。タゞ歌ノ詞ノ中ニ義ヲトルヲ好ト

スペキカ」と述べてゐるのであるが、「改觀抄」の注釈の中では、

久しく命脈を保つた中世的解釈に対し、完全に止めを刺したのであつた。彼は旧来の説を掲げた後に、それは心得がたしといつて、雲の衣霞の衣などいふは、衣の、身をおほふごとくなればいふなり。されば霞のはれたらんをば、衣をぬぐとはいふべし。いかでかあを／＼とのみ見ゆる山を、白妙の衣ほすとはよます給ふべき。春はかすまで夏に入て霞む物ならばさも积すべし。其此御製を取てよまれたる歌どもをみると、いかが心得られけんとおぼつかなき事多し。

と論じてゐるのである。中世的な迷妄が未だ一般に迷妄として自覚されてゐなかつた時代に、久しい伝統をもつた旧説を打破して、曲解せられてゐた古歌の意味を、その本然の姿に戻すことは、契沖の識見に待たなければならなかつたのである。若い日の宣長が「改観抄」を見て感銘をうけたことは、このやうな例によつても想像することができるであらう。

契沖と同じ時代に生きて、堂上歌学攻撃の急先鋒となつた茂睡に

は、「百人一首雜談」の著述がある。奥書によれば完成したのは、「元禄五年七月十八日」であつて、「改観抄」の跋に「元禄五年季夏」とあるのを見ると、契沖と茂睡とは殆ど時を同じうして、東西で百人一首の注釈に従つたのであつた。今、「百人一首雜談」の持続天皇の御製の注釈を見ると、その中には次の如く述べられてゐる。

さて歌の心は、春過てといふにて詞にはなけれども、霞の衣が山にもかゝらぬといふ心をつけてきく也。夏來にけらしといふにて、卯月朔日衣がへゆへ、春の衣をぬぎ捨たるといふ心をつ

けて聞也。霞がかゝらぬへに山のあきらかにみて、明白と云心を、白妙の衣ほすてふと云也。衣がへの色は白きを用ゆる

ゆへ、その縁も有。しかれば明白をしろたへといはんには、左もあるけれども、衣といはん体はなき也。そこで詞にもなき霞の衣を取出して、霞の衣をぬぎ捨たる程に、今日の明白は、白妙の衣をほしたると云心をつけて聞也。（全集本による）

茂睡の注釈は宗祇以来の旧説を祖述してゐるに過ぎないのである。契沖が「霞といふもじさへなきを、とかくいふ事暗推なり」といつて、旧説の非なることを断定してゐるのに対し、茂睡は「そこで詞にもなき霞の衣を取出して」云々といつて、あくまで旧説を弁護しようとしてゐる。茂睡は堂上歌学の破壊に熱情的な意欲を示したが、学者としては、新しく自己のものを打ち建てるまでに至らなかつた。わが注釈史上における「改観抄」の価値や契沖の功績は、ここにも改めて確認せらるべきであらう。

五

右のやうに「改観抄」における持続天皇の御製の注釈は、百人一首の注釈史の上で劃期的な意義をもつものであるが、契沖は白妙の衣を干すといふのが譬喻ではなく、実景であることを主張するための証歌として、袖中抄にある風俗歌「かひがねに白きは雪かいなをさのかひのけごろもさらすてつくり」と万葉集の東歌「筑波ねに雪かもふらるいなをかもがなしきころがにのほさるかも」を挙げてゐる。これらの証歌が「百首異見」に論じてゐるやうに不適切なものか否かは別問題とする。「代匠記」の精撰本にもこの両首が引かれており、初稿本には「筑波ねに」の歌一首だけが挙げられてゐる。しか

し三奥抄でも前に引いた注釈の終りの「又衣を此山に誠に干たるをよませ給ふにも侍るべし」の次に、右の「筑波ねに」の歌をあげ、高山に布をさらす事実の証歌としてゐるのである。白妙の衣を干すといふのを、霞の散じた夏山の譬喩と見る旧説では、この証歌は不要であるから、旧説の集成されてゐる後水尾天皇の「百人一首御抄」や、季吟の「百人一首拾穂抄」を見て、『筑波ねに』の歌を引いた古注は見あたらない。百人一首の持統天皇の御製の注釈にこの歌を引いたのは、「三奥抄」をもつて噴矢とすべきであらう。但し、この証歌は長流の創意であるのか、或は契沖の創意であつたのか、厳密に言へば裏面の事情は不明であるが、長流が最初に用ひ、契沖はそれを踏襲したものと見て差支へはないであらう。先にも述べた如く、「改觀抄」には「三奥抄」の注釈文が、短い部分的なものに至るまで、数へ切れない程多く入つてゐて、「三奥抄」に引いた証歌の殆どはそのまま用ひられてゐるのである。

ここで問題は再び前に戻るが、そのやうに長流の説は「改觀抄」

に多く入つてゐても、大式三位の歌の注釈に見られた如く、それが

長流の説であるといふ説明は少しも記されてゐない。他にも例へば

右大将道綱の母の歌（なげきつゝひとりぬる夜の）や、俊恵法師の

歌（夜もすがらもの思ふ頃は）の注釈の如く、「三奥抄」と「改觀抄」

と殆ど全く内容を同じくするものはいくつもある。然し「三奥抄」

を見なければ、そのことは全然知ることはできないのである。長流

と契沖との関係は、有名な歌によつて知られてゐるやうに、莫逆無

二のものであつたらしいが、親しい人の注釈であるからといって、

契沖がそれを剽竊したとは、恐らく誰しも考へないであらう。そこ

で「改觀抄」の跋文において、契沖がその成立の由来を述べ、長流

が百人一首の注の草稿を完成せずに歿したので、「余其の志を遂げざるを惜みて、続きて之を補へり」（原漢文）と述べてある言葉の意味を深く考へてみる必要がある。「改觀抄」には契沖の卓説も入つてゐるにせよ、契沖は「改觀抄」の注釈の主体は長流の説にあると考へ、「改觀抄」は自己の著述といふよりも、長流の遺稿を補訂したものであると見なしてゐたに違ひない。

その事実は自筆本系統の「改觀抄」の本文の体裁からも考へられる。前に一言した如く、自筆本及びその系統の「改觀抄」では、先づ作者の名を掲げて、その下に系譜や略歴或は略伝などを細字をもつて漢文で記し、次に歌を掲げ、続いて行の頭を下げて注釈が記されている。この記述の体裁は、長流の「歌仙抄」の体裁と同様である。「歌仙抄」二巻は長流の自筆版下により、万治二年八月に開板されてゐて、その内容は人麿以下の三十六歌仙につき、各一首づの歌をあげて注釈を施したものである。この書の本文の体裁は、先づ各作者名をあげ、下に細字の漢文で略伝の類を記し、次に歌を掲げ、字を下げて注を施してゐて、契沖全集第六巻の自筆本「改觀抄」の解説にも、「猶本書の体裁は、下河辺長流の著歌仙抄に頗る似てゐるので、多分それによつたものであらう」と見え、また長流全集上巻の「歌仙抄」の解説にも、「その体裁は頗る契沖の百人一首改觀抄に似てゐる。改觀抄はこれに倣ふ所があつたのであらう」と説明が加へられてゐる。長流の「三奥抄」は、各歌の上三句だけを掲げてその下に小さく作者名のみを記し、歌の右上にその出典となつてゐる歌集名を記すといふ体裁のものである。契沖が長流の「三奥抄」の体裁に倣つて「改觀抄」を書いたことは、「改觀抄」は長流の注釈を主体として、自分はこれを補訂したに過ぎないという考へ

から長流の既刊の著書の体裁を学んだのであらう。

また自筆本の「改観抄」には、それが契沖の純然たる著書であることを意味する識語も署名もない。たゞ長流の遺稿を補つたといふ

跋の終りに、契沖の名が見えるだけである。

「百人一首改観抄」は、契沖の純正な著述ではなく、契沖が長流の説を補訂して成つた書であるといふべきである。「改観抄」には長流の説と契沖の説とが融合してゐる所や、長流の説がそのまま入つてゐる所があつて、我々はこの書の内容を、契沖の他の注釈書の場合と同じ性質のものやうに考へてはならないのである。宣長が「改観抄」を見て心を惹かれたといふのは、今になつてみれば、契沖の説や長流の説に心を惹かれたのであつた。「三興抄」が広く知られるに至つた今日、我々は「改観抄」だけを見て、契沖の説を論ずることは、もはや許されないのである。

web公開に際し、画像は省略しました

執筆者紹介

春日政治

学士院会員
九州大学
名誉教授 文博

高木市之助

日本学術会議会員
東京大学教授 文博

澤瀉久孝

前京都大学教授 文博

小島吉雄

大阪大学教授 文博

宇佐美喜三八

大阪大学教授

八木毅

大阪大学助手

和田誠三郎

大阪大学助教授